
【ハリーポッターと賢者の石 With 仮面ライダーオーズ】

翔太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【ハリーポッターと賢者の石
イダーオース】

With 仮面ラ

【Nコード】

N3636W

【作者名】

翔太郎

【あらすじ】

無欲な旅人、火野映司。
魔法界の有名な、ハリーポッター。

大切な友と両親を失った二人が出会い、物語を紡ぎだす。

s t a g e . 1

9月【9と3／4番線の旅】～10月【ハロウィーン】

s t a g e . 2

11月【クイデッチ】～2月【ニコラス・フラメル】

s t a g e . 3

3月【ノルウェードラゴンのノーバート】～6月【2つの顔を持つ男】

1枚目【手紙と旅人と砕けたメダル】9月（前書き）

【ハリーポッターと賢者の石 with 仮面ライダーオーズ】

始まります！

count the medals!

現在、映司の持つてゐるメダルは

砕けたタカ

1枚目「手紙と旅人と砕けたメダル」 9月

「ただのメダルの塊が、命を無くすところまで来た。こんな面白い、満足することがあるか」

空を落下する青年に手の怪物が語りかける。その仕草は言葉同様、満足そうに見えた。

「俺にとって、お前についたのは得だった……間違いなくな」

手の怪物はそう言うと、去ろうとする。その怪物に青年は手を伸ばす。

「お前の掴む腕は、もう俺じゃないってことだ」

青年はそれでも怪物の手を掴む。だが、その手は掴む前に消え、変わりに割れたメダルが手に乗っていた…

ハリーポッターは今、自分に言われた一言を理解していなかった。

「僕が何だって!？」

「魔法使いだよ。いま言った通り」

ハリーは自分の生まれた一年後に死んだ両親が魔法使いで、しかも、自分も魔法使いになれると言われ、目を丸くした。

「さて、どこまで話したかな？」

ハリーに魔法使いであることをつけた男はハリーに尋ねる。しかし、ハリーの叔父であるバーノン・ダーズリーがその男の尊敬する人物をバカにした為にぶちギレ、息子のダドリーに豚の尻尾を生やさせた。

「いかん、癩癩を起こすんじゃない。このことはホグワーツのみんなには言わなくてくれよ」

ハリーは無言で頷いた。男は納得した表情を見せると、ハリーに眠るよう促した。

過去と未来。今、旅人と魔法使いが出会い、新たな物語を紡ぎ出す。

【ハリーポッターと賢者の石

with仮面ライダーオーズ】

火野映司は旅人である。彼は執着欲を持たない人間である為、持ち物は常に数枚のパンツとちよつとのお金しか持ち合わさない。そんな彼に手紙が来たのは5日前。差出人はダンブルドアという人からで、『世界を巡り、見てきたことを伝えて欲しい』と書かれていた。始め見たときは断ろうと考えていたが、その後、何度も手紙が来た為、映司は渋々、指定された駅に向かっていった。

「ここかな？」

同封された地図を見ると、確かにあっている。

「でも、9と4分の3番線なんて、あるのかな？」

辺りを見渡して見る。すると、大きなカートを持った男の子が壁に向かって勢いよく向かってゆく。

「危な　って嘘っ!？」

見れば誰しも驚くだろう。なんと、男の子は壁にぶつからず、壁に吸い込まれていったからだ。

「もしかして、あそこかも」

映司はそう考えると、その壁に向かう。すると、映司の右となりに、栗色の髪をした女の子が現れた。

「あなたもホグワーツに行くの？」

そう問われ、映司はぎこちなく頷いた。

「う、うん。まあね。君も？」

「そうよ。ねえ、あなた荷物はそれだけ？教科書は？」

映司の手紙に『教科書を用意しろ』なんて書いてなかった為、用意なんてしていない。

「いや、手紙には学校に来てしか言われてないから、買ってないよ。持ち物は明日のパンツとちょっとのお金があれば行けるよ」

持論『パンツ論』を話すと、少女に話すと、少女は顔を真っ赤にした。

「レディによくそんな話を出来るわね！」

「うぶだなあ」と思いながら、映司はとりあえず頭を下げた。と同時に（なんか、ルイズちゃんに似てるかも）思っていた。

「私の名前はハーマイオニー・グレンジャー。あなたの名前は？」

ここまで名乗らずに話したのは始めてなので、映司は戸惑いながら自己紹介する。

「火野映司。趣味は旅かな」

映司が自分の趣味を告げると、ハーマイオニーの目が見開かれた。

「日本人って言うのも珍しいけど、その歳でいろんなところ旅したの？」

ハーマイオニーの言葉に映司は疑問を持った。なんせ、今の自分の年齢は20才。『この歳で』と言われたことはないからだ。

「グレン」

「ハーマイオニーでいいわ」

「ハーマイオニー、この歳ってどういうこと？」

ハーマイオニーは首を傾げた。

「だってあなた……11才でしょ？」

映司は思わず首を傾げた。ふと、鏡を見ると、なんとそこには、幼い頃の自分がいた。

「背が縮んでる！？なんで!？」

映司は必死で考えを巡らせた。すると、昨日の夜に露店で買った怪しい栄養ドリンクしか思いつかなかった。

「あのジュースか…はあ…。しかたない」

映司は持ち前のポジティブで、なんとか考えた。

「ごめん。話を中断して。一応、いろんな国に行つたよ。いろんな人に出会つたし、いろんな人を助けたり…闘つたり」

最後の言葉をハーマイオニーは聞いてなかった。

「勉強はしてきたし、何があっても大丈夫だと思つよ」

「まあ、そうよね。それより、席を探しましょ」

知らぬうちに列車内にいた映司はハーマイオニーとコンパーメントに入る。

「ねえエイジ、そのメダルって何？」

エイジの首にかけられた赤い鷹のマークが入り、真つ二つに砕けたメダルを見て、ハーマイオニーが呟いた。

「これ？大切な相棒との残された絆と託された思いと、願い……か

な」

それは映司が再び旅をする決意をくれた奴であり、アイスを買ってやる奴であり、力をくれた、異形の親友の筐なのだ。

「ねえ、そのメダル、かして」

映司はそのメダルをハーマイオニーに渡す。するとハーマイオニーは杖を取りだした。

「レパロ！直れ！」

杖先から光が放たれた瞬間、メダルは碎けるまえの一枚に戻る。

「アंकのメダルが…元に……」

「もしかして、治しちゃ駄目だった？」

ハーマイオニーが上目遣いで訪ねてきた。映司は勢いよく首をふった。

「ありがとう」

映司の目には微かな哀愁が漂っていた。

side・日本

レコードから誕生歌が流れる部屋で、男がスポンジにクリームを塗りたくっていた。

「会長、例のコアメダルと10枚目のサイ、ウナギを火野さん宛に、フクロウでおくりました」

「ありがとう里中君。私達の知らない世界の裏で、グリードが復活してしまっただけならいいからね。世界を守る為に、彼には再び戦って貰わねばならない……無欲な彼でなく、無欲が欲の彼にね……」

side・映司

本を読みながら眠ってしまったハーマイオニーを膝枕して寝かせながら、

映司はハーマイオニーに治して貰ったタカメダルを手中で遊ばせた。

「アंक……」

映司がタカメダルを遊ばせていると、コンパイルメントのドアが開き、駅員のような人が現れた。

「火野映司さんですね？これ、お届けものです。んじゃ」

不思議な木箱を渡され、戸惑う映司。同封された手紙を開く。そこには、何かの番号が書かれていた。映司はその番号をiPhoneに入力する。

「ハッピーバースデーッ！」

懐かしい声が大音量で流れる。

「久しぶりだね。火野君。今日は君の入学日とダンブルドアから聞いているよ」

彼の名前は鴻上光生。鴻上ファウンデーションの会長であり、800前にヨーロッパにいた王、クガ王の子孫だ。映司の闘いを支援してきた。

「その箱を開けてくれたまえ」

鴻上に言われるまま、箱を開ける。そこには、赤、黄、緑、銀、青、橙色のメダルが並んでいた。

「これ…何で!？」

コアメダルはかつての闘いで全て砕かれ、消滅したはずだ。タカ一枚を残して。それなのに、ここには18もあるのだ。

「実は、ドクター真木の研究に残されていた、コアメダルの製造方法を記した設計図から造り出したんだよ。ただ、錬金術という概念がない現代社会では無理だったため、ニコラス・フラメルとアルバス・ダンブルドアに頼んで制作して貰ったのだよ」

鴻上の話を聞きながら、映司はある考えが浮かんだ。

(もしかして…グリードが…また?)

「火野君、君は800年前の王がコアメダルを造ったさい、どうしても余りのメダルが出てしまった。それは、イギリスで封印されていた」

鴻上の横で里中が紙芝居を始める。

「そのメダルは五色五枚。だったのだが…7年前、とある事件の際に盗まれ、近年、イギリスで欲望の怪物として確認されている。最近は、ホグワーツにいるらしい」

映司は鴻上の説明から、利用されてるんじゃないかと、考えた。
が…

「もし、旅をしてる最中にイギリスに行ったなら、グリードを探して見てくれないかね？」

映司は目を丸くするが、すぐに持ち直し、「今、ちょうどその学校に行く列車に乗ってるんですけど…」と言うと、鴻上は喜んだ。

「素晴らしいっ！流石、オーズだよ！こちらからも、出来るだけ支援するよ！それじゃあまた！」

鴻上との連絡が切れ、映司は肩を下ろした。そして、メダルの入った箱をどうしようか迷っていると、突然、列車が急停止した。映司は吹っ飛びそうになった。

「何が……………」

映司はコアメダルの箱をその場に置くと、映司はコンパーメントを出て、いっさんに駆け出した。

次回

2枚目【欲望と変身とオーズ復活（リターンズ）】9月（前書き）

これまでの【ハリーポッターと賢者の石 with 仮面ライダー
オーズ】前回までの3つの出来事

1つ、旅をしていた映司がホグワーツに向かうためキングズクロス
駅に向かう。

2つ、その道中、ハーマイオニーと言う少女と出会う。

3つ、ハーマイオニーと話していると、鴻上からメダルを送ら
れる。

count the medals! 現在、オーズの使えるメダル
は…

砕けたタカ一枚。

2枚目「欲望と変身とオーズ復活（リターンズ）」9月

ハーマイオニーが目覚めると、そこに映司の姿は見当たらなかった。かわりに、見覚えのない箱が置いてあった。

「何かしら？」

中には映司の持っていた赤いメダルの色とマーク違いの同型のメダルが並んでいた。

「綺麗……っ！これ」

箱の裏に彫られた謎の刻印。ハーマイオニーは何処かで見たような気がした。

「確か……『闇の魔術興亡』に載ってた、クガ王のマーク！」

闇の魔術は魔法を使う人にとって、影のような存在。その為、嫌われている。そして、その闇の魔術の基本を作り出したのがクガ王なのだ。

閑話休題

ともかく、ハーマイオニーは映司に問おうと、コンパーメントから飛び出した。

side・グリード

バッタのような頭部に緑のバイザー、背中には剣と盾を背負った異形の怪物 グリードの一人、フェンサーがいた。

「確か、ホグワーツの連中の乗った列車だな。ちょうどいい…寝覚めにヤミィを作るか」

フェンサーはメダルを取り出すと、運転手の額に投げ込む。運転手の額に、メダルの投入口が現れ、メダルは運転手の体内に入る。その瞬間、運転手の口から包帯で巻かれた怪物が生まれる。それを見たフェンサーは一言呟いた。

「その欲望、解放しろ」

と…

side・列車内。

包帯で巻かれた怪物は女子生徒に向かって襲い掛かる。それを見た男子生徒の何名かは、魔法を放つ。しかし、魔法は怪物に効果がなく、無効にされてしまう。

「1から4年生は後ろのコンパートメントに急いで！」

パーシー・ウィーズリーは指示をすると、無駄とわかっていたが、魔法で怪物を牽制する。

「うう……」

怪物はゾンビのような鈍い足取りでパーシー達に近づいて来る。

「『『『ステューピーファイ!』』』」

パーシーを含む四人の生徒の同時魔法によって、怪物ふつとぶ。

「やったか?」

パーシーが確認しに行こうとすると、怪物は突然苦しみだし、咆哮をあげる。

「うおおおおっ!!!!!!」

怪物の体が破れ、そこにカマキリカブトヤミーが誕生する。

「ふんっ!」

雷の衝撃波が周囲に放たれ、沢山の窓ガラスが割れ、椅子が砕ける。パーシー達はその光景に恐れをなし、後部のコンパーメントに向かう。ゆっくりと歩みを進めるカマキリカブトヤミー。パーシー達は走って逃げた。あまりの怖さに……

side・映司

映司は誰もいない列車中部のコンパーメントから抜け出す為、外に出る為の扉の前に立った。開けようと手を伸ばすと、その手が掴まれた。

「ハーマイオニーちゃんか。どうかした?」

ハーマイオニーは箱を開け、映司に見せる。

「このマーク、クガ王の紋章よね？あなたは闇の魔術を使うの？」

ハーマイオニーが映司に杖を向けながら問いかけてくる。映司はハーマイオニーの言ってることを理解できず、首を傾げた。

「ハーマイオニーちゃん、それってどういう意味？」

「知らないなら教えるわ。そのマークは闇の魔術を使用し、クガ王に忠誠を誓うって意味になるのよ」

映司はそんな話を聞いたことが無い。というか、今までそんなことも無いため、顔をしかめる。

「これを手放して。そうすれば……」

「ここにあつたか…メダル。そのメダルを渡せ！ご主人様に土産として持って帰る」

ハーマイオニーの持ったメダルを見て、カマキリカブトヤミーが促す。

「ハーマイオニーちゃん、逃げて。ここは、俺が食い止めるから」

映司はハーマイオニーの手を握ると、後部のコンパーメントに行く為の扉を開け、ハーマイオニーをそこに押し込む。

「エイジ！あなた何を言ってるの!？」

映司はそれに答えず、鍵を閉める。

「…ここからは一步も通さないよ」

「貴様…」

映司は身構える。カマキリカブトヤミーは腕の鎌で手すりを切り落とす。映司は鎌を振った後の僅かな隙を狙って、回し蹴りを叩き込み、カマキリカブトヤミーを怯ませる。

「はぁ！」

続けて二段蹴りが放たれ、カマキリカブトヤミーは鑪を踏む。

「人間風情が！」

カマキリカブトヤミーは右腕の鎌を振り払う。すると、斬撃が放たれ映司に襲い掛かる。

「！？」

放たれた斬撃はギリギリ映司を逸れ、斜め後ろの壁を斬り裂いた。

「避けたか……だがそれも無駄なこと！」

無数の斬撃が放たれた。映司は回避しようとするが、その中の数発が映司の右腕、脇腹、太ももを決る。

「あぁっ！」

「終わりだ……」

カマキリカブトヤミーはゆっくり歩を進め、映司に向かって歩い

てくる。

「映司！逃げて！ねえ！映司！」

ドア越しにハーマイオニーの声が聞こえるも、映司は動けない。
カマキリカブトヤミーの足がついに映司の一步手前に迫る。

「終わりだ！」

降りおろされた鎌が映司を斬り裂いた……………

「いやあああああつ！！！！」

ハーマイオニーの悲鳴が響く。見ていた誰しもが、映司が殺された、そう思っていた。

「まったく…目覚めて最初に厄介ごとなんて…しかし、お前もついでないなあ……………映司」

金髪の青年がその鎌の一撃を受け止めていた。

「アंक……………どうして？」

映司は驚きを隠せなかった。なにせ、アंकのコアメダルは自分が持っているし、セルメダルもないから復活出来ないはずなのだ。

「お前、パンツの中に、セルメダルがあつたら、それで腕だけ復活させた。つか、パンツの中にコア入れんな！！」

映司は納得した。実は旅立つ直前、セルメダルを鴻上から渡され

ていて、使い道が無いため、ずっと放置してたのだ。……パンツの中に…

「まあ、お陰で復活出来たが…パンツは無いな。なあ映司、まだセリが足りない。稼いでくれるか？」

アंकは右腕を映司に向かってつき出す。映司は、ふっ、と笑うつと頷いた。そして、ハーマイオニーのいるコンパーメントの鍵を開ける。

「ハーマイオニーちゃん、心配かけてごめん。これ、貸して」

映司は泣きじゃくるハーマイオニーからメダルの木箱を取ると、アंकに渡した。

「アंक、さすがに完全復活とはいかないけど、これで五感を取り戻せるよな？」

出されたメダルを見て、アंकは驚いていたが、暫くして首を振った。

「やっぱバカか…安心しろ。俺に五感はある。生憎な」

そう言って不適に微笑みながら、アंकはかつての仲間の一人、比奈から貰ったメダルホルダーを取りだし、メダルをしまつてゆく。三枚を残して。

「映司、稼げよ」

投げ渡された三枚。それを受けとると、腰にオーズドライバーを

装着する。

「久しぶりだな…この腰を締め付けるベルトの感覚」

ベルトの3つの穴の両サイドに緑と赤のメダルを入れる。

「それは……王の…貴様、王の末裔か!？」

カマキリカブトヤミーがオーズドライバーを見て叫ぶ。映司は三枚目のメダルを弾くと、呟いた。

「違うよ。俺は今も昔も、旅人だよ」

「では何故闘う!？」

その問いに映司はメダルをキャッチして答えた。

「あの日も、去年も、決めてたから…後悔しないようにするって!」

三枚目を真ん中に装填し、バックルを構成しているオーカテドラを斜めに傾ける。そして、右腰にあるオースキヤナーを握る。独特な低く唸るような起動音が静まった車内に響きわたる。映司は、カテドラに沿わせ、メダルをスキャンする。

「変身!」

赤、緑、黄、灰、青、無数のメダルのエフェクトが映司の体の回りを回転する。

《タカッ!》

赤いメダルのエフェクトが映司の頭の前で止まり、

《トラッ!》

黄色いメダルのエフェクトが胴体の前で止まり、

《バッタ!》

緑のメダルのエフェクトが映司の下半身の前で止まる。

《タットバ! タットバ! タットバ!》

三枚のメダルに描かれた動物の意匠が一つになり、体の中心にある巨大な円形のプレート『オーラングサークル』を形成。そこから四肢に向かって流れるエネルギー流道路『ラインドライブ』。額にある菱形の宝石『オークオーツ』が輝く。

欲暴（欲望の暴走）を切り裂き、人々に手を差し伸ばし続ける、三色の戦士。仮面ライダーオーズが復活した。

設定

クガ王

800年前のオーズ。この作品では闇の魔術を作り出したとされている。

オーズのタトバの紋章はクガ王、延いては闇の魔術を使用している
ととらわれている。

ちなみにその他のコンボでは

ガタキリバが雷と雲、

サゴーズが大地と重力、

シャウタが海と水、

タジャドルが天空と炎

ラトラーターが太陽と風を表している。

タトバ以外のコンボは『闇の魔術興亡』に掲載されておらず、知
っているものはいらない。

何故、タトバコンボのマークが駄目と言われているもうひとつの理
由として、

タカは不幸を運び、トラは人を喰らい、バッタは穀物を荒らす

と昔、言われていたからだ。

3枚目【闘いと決着と3人の出会い】9月（前書き）

これまでの【ハリーポッターと賢者の石 with 仮面ライダー
オーズ】

前回までの3つのあらすじ

1つ、 hogwarts 特急に グリッド 来襲。 運転手から ヤミー を造り出す。

2つ、 生身で ヤミー と闘い、 傷ついた 映司 を、 復活した アンク が助ける。

3つ、 映司 は タトバ に 変身 する。

count the medals!

現在、 オーズ の 使える メダル は：

タカ

トラ

バッタ

3 枚目【闘いと決着と3人の出会い】9月

ハーマイオニーはドアごしに起きている事実には驚きを隠せなかった。目の前にいるのは、自分と同じくらいの背丈だった映司が成長し、大人程の大きさになっていて、しかも、赤、黄、緑の変な鎧を着た戦士になったからだ。ハーマイオニーは扉を開けると、映司に駆け寄る。

「映司なのよね？」

恐る恐るハーマイオニーが訪ねると、頷いた。

「そっだよ。安心して。」

「アंक、彼女をお願い」

「ああ。来い縮れ毛。闘いの邪魔だ」

ハーマイオニーは襟首を掴まれ、コンパーメントに連れて行かれる。

「あなた誰？私はハーマイオニーよ！それから、あの鎧みたいなのは何！？」

ハーマイオニーが勢いよく聞くと、アंकはめんどくさそうな顔をした。

「俺はアंक。俺はあいつを……利用してるに過ぎない」

「最低ね。あんな年端のいかない子を利用するなんて」

ハーマイオニーは映司が11才だと思っているため、アंकを罵った。

「はっ！何とでもいえ。事實は変わらないんだからな」

そう言ったアंकの表情はどこか寂しそうだった。

side・オーズ

両腕のトラクローと鎌がぶつかり、火花を散らす。

「危ない危ない！」

久しぶりに扱うトラクローの感触に懐かしさを覚えつつも、映司は再び身構える。降り下ろされる鎌をトラクローで受け止め、蹴りを繰り出し、カマキリカブトヤミーと距離を取る。

「はぁあっ……」

バッテリーにラインドライブからエネルギーが供給され、一気に飛び上がる。そのまま、右足の飛び蹴りを放ち、吹っ飛ばす。

「映司！こいつにかえろ！」

コンパイルメントのドアが開き、アंकがメダルを投げ渡してくる。

「おっとっと！」

カテドラルを水平に戻し、真ん中のトラと入れ換え、カテドラル

を傾け、スキャンする。

《タカツ！ゴリラッ！バッター！》

真ん中をゴリラに変えた、タトバコンボの亜種、タカゴリバにメダルチェンジすると、強烈な右ストレートを喰らわせる。

「成る程ね。確かに堅いお前でも、これなら倒せるかも」

鎌の斬撃を拳で砕き、アッパーを繰り出し、体制が崩れた所へすかさず左ジャブが繰り出され、カマキリカブトヤミーは地面を転がってゆく。

「さてと…そろそろ決めないと不味いでしょ」

スキャナーをカテドラルに添わせて、メダルを再スキャンする。

《スキャニングチャージ！》

バッタレッグの形状がバッタ脚に変化し、空高く舞い上がる。そして、タカヘッドの能力で敵に狙いを定め、両腕のガントレット『ゴリバコーン』を放つ。

「はぁあっ…セイヤアアアアッ！」

カマキリカブトヤミーはその一撃を受け、セルメダルに変換される。

「ふう。こんなもんか」

映司は変身を解除すると、1、2枚のセルメダルを拾いあげる。

「まあ、いつか」

映司はコアメダルをポケットにしまい、列車に戻る。

「アंक、ありがとな」

映司はアंकにコアメダルを渡そうとする。しかし、アंकが受け取ったのはゴリラだけだった。

「それはお前が持つとけ。無くすことはないだろうが、一応預けとく。あつたほうが便利だろ？何処にでも、手を伸ばせるからな」

「アंक…」

映司はアंकの言葉に耳を疑った。アंकは振りかえると、不適な笑みを浮かべていた。

side .

その後、ホグワーツ特急は直り、到着予定時刻を30分遅れてホグワーツに到着した。

「やっと着いたか」

「映司、俺は適当に歩いてるから、何かあつたら呼べ」

「ああ。お腹空いてないのか？」

映司が問うとアंकは鼻で笑った。

「バカか。俺はグリードだ。腹は好かないぞ」

「そっか…そうだよな。じゃあな」

アंकにそう告げると、映司はハーマイオニーと共にボートに乗り込む。

「エイジ、あなた怖くないの？」

ハーマイオニーがボートに乗った直後、すぐに問いかけてくる。

「ううん。怖くないよ。ホントに怖いのは、自分が何も出来ずに、人が死んでく事。後悔したくないんだ」

そう言った映司の表情は決意を表すようにかっこよく見えた。ハーマイオニーは思わず、顔を赤くする。

（な、なんだろう。このドキドキして、ふわふわして、ムズムズする気持ち。映司の顔、かっこよく見えるし）

雨が降っているのもあるが、とにかくハーマイオニーには映司がかっこよく見えていた。

それを知らない映司は眼鏡の男の子と赤毛の男の子と話していた。

「俺は火野映司。君たちの名前は？」

「僕はハリー。ハリーポッターだよ」

「僕はロン。ロン・ウィーズリー」

互いに名乗ると、三人は握手を交わした。この出会いが、後に伝説を作ることとなる今は誰も知らない。

次回

【入学と組分けと4つの寮】

今回使ったメダル

タカ

トラ

バッタ

ゴリラ

4 枚目【入学と組分けと4つの寮】9月（前書き）

【ハリーポッターと賢者の石 with 仮面ライダーオーズ】
前回までの3つのあらすじ

1つ、オーズに変身し、ヤミーと戦う

2つ、ヤミーを撃破。ホグワーツ特急は30分遅れてホグワーツに到着。

そして3つ、映司はハリーやロンと始めて出会う。

count the medals!

現在、オーズの使えるメダルは…

タカ

トラ

バッタ

ゴリラ

4枚目【入学と組分けと4つの寮】9月

State 2 9月1日【入学式】

【入学と組分けと4つの寮】

船は地下の船着き場に到着する。生徒達は不安げな足取りで、先頭にいるルビウス・ハグリットの後についてゆく。

「何か薄気味悪いな……」

映司はそう呟くと、隣にいるハーマイオニーを見る。必死な形相で何かをしきりに呟いているのだ。ある意味、こっちも不気味だ。

「ハーマイオニーちゃん？ハーマイオニーちゃん？」

「何よ！今、覚えた呪文を復習してるとこなの。邪魔しないでくれる？」

列車の一件の後からハーマイオニーは厳しくあたるように感じた。

「あ……………」

女の子と付き合ったことのない映司は、こんなときどう声をかけたらいいか解らず、戸惑う。

「……………ごめん」

映司は素直に謝った。

生徒達は全員、ホール脇の小部屋に入る。小部屋は狭いため、ぎゅうぎゅうにつまっているため、こんなことも起こる。

「ちょっと！どこ触ってんのよ！」

「俺、お尻触ってないよ！」

こんなことや…

「痛い！足踏んでる！」

と。この騒がしさに副校長のミネルバ・マクゴナガルはイライラしながらも、毎年恒例の挨拶をする。

「ホグワーツ入学おめでとう」

マクゴナガルの挨拶で静まる。ただ二人を除いて。

「アंक、お前そのアイス何処で貰ったの？」

「あ？変なじいさんから貰ったんだ」

話してるのは勿論、映司とアंकである。

「変なおじさん？あの、ピンクの服着た、ハゲたおじさん？」

「バカか！それは志 けんの演じてる姿だ！つか、じいさんだ！」

マクゴナガルの額に青筋が浮かび、眉が痙攣していることに気づかない。見かねたハーマイオニーが映司を小突く。

「エイジ…エイジ！」

「確かに………何、ハーマイオニーちゃん？」

「マクゴナガル先生が怒ってらっしゃるわよ」

アंकと映司は互いに目を合わせてから、マクゴナガルを見る。

「お話がしたいなら外でしますか？」

マクゴナガルに皮肉を言われ、映司は首を横に振った。

「よろしい。」

新入生の歓迎会の前に、皆さんの寮を決めなくてはなりません。寮の組分けはとても大切な儀式です。ホグワーツにいる間、寮生が学校での皆さんの家族のようなものです。教室と一緒に勉強し、寝るのも寮。自由時間も寮の談話室で過ごします」。

「それぞれの寮に輝かしい歴史があります。皆さんがどの寮に所属しても、その寮の為に良い行いをすれば、寮の得点になり、逆に悪い行いをすれば、その寮から減点します。

皆さん1人1人が寮にとって誇りになるよう望みます」

「準備が出来しだい、呼びます。それまで身なりを整えておくように」

そう言うつと、マクゴナガルは去っていった。

「ふう…組分けて何すんのかな？」

映司がアंकに問いかけると、アंकは首を傾げた。

「さあな。どうするんだろうなあ」

アंकは最後のアイスを噛み砕きながら答えた。

「ああ、何か試験みたいなことをするんだって。とっても痛いって
言ってたけど、多分冗談だよ」

「試験!？」

映司は思いっきり目を丸くした。だって、手紙に試験があるとは
言ってなかったしetc・・・とにかく、映司は自分の知ってる
魔法の呪文を思い浮かべ、口に出した。

「テクマクマヤコン? ムーンプリズムパワー? ビビデ・バビデブー
? マージマジ・マジロー?」

「映司! 作品違えぞ! 何で... つか、ムーンなんたらは『セーラー
ン』だろ!」

映司のポケ具合に思わずシャウトするアंक。そんな二人のやり
取りを見て、何人かの生徒が吹き出す。

「君たちのやり取りは見てると面白いや」

ロンが腹を抱えてゲラゲラ笑った。それにつられ、ハリーも笑い
だした。

「良かった。元気出たんだね」

映司はにつこり微笑んだ。その笑みにハリーとロンは安心感を覚えた。しかし、そんなこともつかの間。再び扉が開き、マクゴナガル先生が声をかけた。

「全員、一列になって私の後ろについて来なさい」

マクゴナガルに言われる通り、一列に並ぶ。映司の前はハーマイオニー。後ろはハリーとロンが並んだ。マクゴナガルが扉を開け、それに続く。暫くして映司の目に飛び込んできたのは、不思議で素晴らしい光景だった。空中には火のついた無数の蠟燭が浮かび、眼下に広がる4つのテーブルを照らしていた。テーブルには上級生が座っており、金色の皿とゴブレットが並べられていた。映司達のいる上座には先生の席もあった。映司達は先生に背を向ける形で、上級生の方に向いた。映司は上級生達の視線を外すように、天井を見た。

「空？」

眺めた天井には漆黒のマントにダイヤを縫いつけたような、星空が広がっていた。

「本当の空に見えるように魔法がかけられているの」

ハーマイオニーが映司に説明してきた。

「へえ、ハーマイオニーちゃんって物知りなんだね」

映司が誉めると、ハーマイオニーの顔が赤くなった。

「そ、そんなことないわよ。ただ、本を見て覚えただけよ」

褒められることが少ないのか、ハーマイオニーは動揺してる。

「凄いと思うよ。俺なんか、本を読むの苦手だもん」

ハーマイオニーをべた褒めする映司。段々あまゝい空気になっていたのか、何人かの女子が聞き耳や背伸びして2人の様子を伺っていた。

「グレンジャー・ハーマイオニー！」

ハーマイオニーの名前が呼ばれ、ハーマイオニーはハッと我に帰る。そして、椅子の方に向かった。

side・ハーマイオニー

ハーマイオニーは椅子に座り、組分け帽子を被った。心臓は緊張でバクバクと高鳴っている。

「君は…知性もあるし、勇敢なところもある……ふむ…それならばグリフィンドール！」

ハーマイオニーの心は緊張から喜びに最速変換された。その早さはファイズアクセルフォームにも勝るほどに。そして、ハーマイオニーのグリフィンドール行きが告げられると、グリフィンドールの寮生は歓声に湧いた。ハーマイオニーは椅子から飛び出すと、グリフィンドールの席に走っていった。

side・映司

「ヒノ・エイジ！」

ハーマイオニーの後だとわかっていた為、映司は落ち着いた足取りで椅子に向かい、腰を下ろす。特にどんな寮に入りたいかも決めていない映司は、帽子の采配に身を任せようと思っていた。

「ふむ…ふむ…どこにも手が届く程の友人を作りたいか……知恵も必要だし、勇気も必要、忍耐も必要。さてどうするか」

映司の欲は欲ではない。映司のそれは誓いであり、決意でもあった。その決意を胸に、様々な国で交友関係を作り上げてきた。

「こんなに欲がない人間は初めてだ。1078年生きてきて……ふむ、そうだな…それならば…それならば…」

組分け帽子は迷う中、映司は帽子を被ってから始めて声をだした。

「後悔しないように生きる」

「？」

映司はわざと皆に聞こえるように言った。

「一度きりしかない人生なら、俺は後悔しないように生きたいんです。ただ、失敗したら駄目とかじゃなくて、その失敗をいかせたから今はこう生きてるっていう、マイナスをプラスに変えるような人生にしたいなって…」

「これはこれは…とんだ逸材だ……それならば、グリフィンドール！」

映司の言葉の意味を考えていた生徒達は、映司がグリフィンドールと呼ばれたことに気づいていなかった。なので…

「グリフィンドールっていつてんだろーが！このバカちゃんがあっ！」

組分け帽子の叫びで、やっと理解したのか、グリフィンドールは拍手する。映司はグリフィンドールの席に座った。勿論、ハーマイオニーの隣に。

side・ハーマイオニー

（良かったグリフィンドールで！）

ハーマイオニーは安心していた。色んな人から握手を求められ、ハーマイオニーはそれに応じる。

「ヒノ・エイジ！」

映司の名前が呼ばれ、ハーマイオニーは上座に注目する。

（お願い！彼もグリフィンドールに）

ハーマイオニーは手を組んで目を瞑った。普段、神様を信用しないハーマイオニーも今回は神に頼んだ。しかし、帽子は悩んでいた。すると、映司がいきなり話し出した。

「一度きりしかない人生なら、俺は後悔しないように生きたいんです。ただ、失敗したら駄目とかじゃなくて、その失敗をいかせたから今はこう生きてるっていう、マイナスをプラスに変えるような人

生にしたいなって…」

映司の一言にハーマイオニーはビックリして目を丸くした。

「グリフィンドール！」

その直後に帽子の言った一言にハーマイオニーは気づかない。

「グリフィンドールっていつてんだろーが！バカちゃんがあっ！」

ハーマイオニーは自分の耳を疑った。だが、映司はまっすぐこちらに向かって来る。

「よろしく。ハーちゃん」

「ハーちゃん？」

「ほら、ハーマイオニーちゃんだと呼びづらいから。ハーちゃん。駄目かな？」

「いいわ！凄くいいっ！」

ハーマイオニーはニックネームをつけられたことがない。というのも、私立の女子小学校に通っていた際、ガリ勉すぎて友達がいなかった（少ない）。その為、ニックネームをつけられることもなかった。

当然、ハーマイオニーは今の自分の気持ちはどう言ったものか……気づかないだろう。

side・映司

パーティーも終わり、校歌を歌い、それぞれの寮の監督生に連れられ、新入生達は各寮に向かう。そんな中、映司はふと視線を感じて振り替える。そこには、流れるような銀髪に半月眼鏡をかけた、老人。ホグワーツ校長アルバス・パーシバル・ウルフリック・ブライアン・ダンブルドアその人がいた。

「ミスターヒノ。少し、話したいんじゃないか？」

「良いですよ」

断る理由もないため、映司はダンブルドアと話しをする。

使えるメダル

タカ

トラ

バッタ

ゴリラ

次回

9月2日～9月4日

【先生と授業と銀製の針】

5枚目【先生と授業と銀製の針】9月

映司はダンブルドアと共に校内を歩く。先程までと打って代わり、異様な静けさを放っていた。

「君は鴻上光生を知っているかの？」

「はい。知ってます。あなたがメダルを作ったことも」

ダンブルドアは少し驚いた素振りを見せたが、頷いた。

「そうじゃ。君の持つコアメダルに興味があつての。マグルの様々な歴史的文献や、遺跡を見に行つたのじゃが、ようわからなかつた。そんな時、光生がメダルの話を持ち掛けて来ての。わしはその話しのつたのじゃ」

ダンブルドアはその話を嬉しそうに語る。映司はダンブルドアがコアメダルに興味を持ったのか気になった。だが、そこにはその理由だけ聞いてはいけなような空気が漂っていた。

「さて…君を学校に招いたのは、ホグワーツを守ってほしいからじゃ。知つての通り、ホグワーツは子供が多い。故に、欲望は渦巻いている。その欲望を暴走させてほしくないのじゃ。だから、君の出来る範囲で、生徒を守ってほしい」

ダンブルドアは真剣な表情で映司を見据える。映司は静かに頷いた。

「わかりました。全力で皆を守ります」

映司は静かに頷いた。そして、一礼すると、寮に戻る為に、道を引き返した。

アंकはホグワーツの屋根の上でi padを弄っていた。映司が持ち歩いていたものであったが、あまり使われていないようなので、アंकは拝借した。

「そっぴゃ、比奈や伊達はどうしてんだろっぴゃあ」

出会った最初のころは唯の人間だと思っていた。しかし、一緒に戦って行くうちに仲間意識が生まれた（アंक自身はそれを外に出してないが）。

「しかし……」

アंकは自分の右腕を怪物化させた。

「まさか復活出来るなんてな…十分、満足したんだがな…」

右手を撫でながら、アंकは鼻をならす。

「おーいたいた」

アंकが振り返ると、映司が窓から覗きこんでいた。

「映司か…」

アंकは立ち上がると、右手をもとに戻した。映司はアंकのいる屋根の上に降りる。

「映司」

「何？アंक」

「お前に復活させて貰った礼だ。お前の言っただように、人の命。優先させてやるよ」

映司はそれを聞いて目を丸くする。だが、それ以上にアंक自身も自分からこんな言葉が出るとは思っていなかった。

（俺もヤキがまわった…か、こいつと暮らして、人間らしくなったのか…）

アंकは映司を見て自重気味に笑った。

「アंक、お前、悪いもん食べた？」

その瞬間、アंकの右手から火炎弾が飛び出す。火炎弾は映司を避け、壁に穴を開ける。

「映司、燃やすぞ！」

アंकはそう言うと、窓から部屋に戻っていった。

side・朝

翌日の朝。学校でハリーポッターと同じように有名になっている人がいた。

「あれがミスターヒノ？」

「隣金髪は従者だつてよ」

「ジャッポーネの人つて、チョンマゲにハオリバツカーマ（羽織り袴）、腰にはサムライソードを持ってるんじゃないの？」

「このイケメン嫌いじゃないわっ！」

と様々な声が飛び交う。有名人は火野映司だ。

「アंक、何でこうなるの？」

「俺に聞くな！」

映司は様々な声が飛び交うなかを、アंकと一緒に教室に向かう。何故、映司がここまで騒がれているのか？理由は映司の人種にある。実はホグワーツのこれまでの歴史上、日本人の生徒がいなかったのだ。さらに、生徒も日本人を見るのは始めての人もいるため、ここまで騒がれたのだ。

閑話休題

とにかく、映司は迷っていた。

「そういえば…薬草学はこの教室にいけばいいの？」

映司は疑問に思い、アंकに尋ねた。アंकは、はあ？と声をあげる。

「お前なあ…まあいい。とにかく探すぞ」

アंकは出かかった文句を呑み込み、アंकは映司と一緒に薬草学の教室を探し始めた。

ホグワーツは当然、マグル（魔法の使えない人）の通う学校とは違っていた。まず、階段の数が142もあり、どの階段も時間で入れ換わり、行く場所が変わってくる為、その時間を把握しなければならぬ。さらに、その階段の1つ1つに個性がある。

女子がお辞儀しないと通してくれない階段。や、階段の段が1日ごとと階段の穴の開く場所が変わる階段。

12時になると消える階段。

など。それら全てを『仕掛け階段』と呼ばれている。

扉も種類が沢山があり、くすぐらないと開かない扉や殴らないと開かない扉、壁のようで実は、扉っていう扉。取っ手が真下にある扉。等々、ありすぎて書ききれない。

学校にいるゴーストも驚かされる。扉を開けようとすると、ゴーストが扉を通り抜けてひやっとする。グリフィンドールの寮ゴースト『ニコラス・ド・ミムジ・ポーピントン卿は新入生に優しく、道を教えてくれる。しかし、ゴーストの中には、いきなり憑依して「俺、参上！」って言うゴーストや、いきなり女子をナンパするゴースト、イケメンを見つけると「キラリじゃないわ!」と叫ぶゴーストもいる。そんなゴーストの中でも、一際厄介なのは、ポルターガイストのピーブズだ。ピーブズに出会すと、大抵遅刻する。まず

、生徒の頭上で生ゴミの入ったバケツを落下（ハーマイオニーがこの攻撃で、1日中生ゴミ臭かった）させたり、生徒の鼻を摘まんで「釣れたぞ!」

とキーキー声で叫んで、そのまま上に持ち上げる。

余談だが、ピーブズはこれをアंकクにやろうとしたが、アंकクは腕を怪物化させ、ピーブズを炎の纏った拳で思いつき殴り付けた。すると、ゴーストは炎に弱い?らしく、ピーブズの頬が黒ずんでいた……らしい。その光景を見た生徒からは…

「素晴らしい右フックでした!」H・P君

「ピーブズが毬みたいに跳ねてたな」L・W君

「ゴーストには触れられないのに、何で殴れたのかしら?」H・Gさん

「鬼の手?」S・F君

これ以降、ピーブズはアंकクの下僕になった…。

さて、クラスにたどり着いても、授業は大変である。魔法学校というだけで、杖を振り回し、バカげた呪文を唱えると思っていた人そんなことないんだこれが。

薬草学はスプラウト先生が担当している。ずんぐりした体型だ。一週間のうち三回は温室に行き、よくわからない草花の説明を受ける。ヤガミハラグロイや、マオウナノハやら、ゴダイニンジンやら、ツガミヨモギなど。

アंक曰く「絶対に食いたくない」だそうだ。

『魔法史』の担当はこれまたゴーストのビンズ先生。アंकは先生のことを『瓶詰』と呼んでいる。

この先生、昔、暖炉の椅子の前で居眠りをしていたら、その時の年齢もかなりのもので、起きた時に自分の体を椅子に置いてきてしまったらしい。映司はこの話を聞いて、感動した。

だが授業は退屈で、ずっと一本調子な口調で説明するため、生徒は居眠りしてしまうものが続出している。ただし、映司は眠れない。何故なら、日本では何があったかをしきりに聞かれるからだ。後、居眠りしてないのはハーマイオニーと、iPhoneで『太の達人』をやるアंकぐらいだ。

アंक曰く「鬼の3倍速の北埼玉は厳しいな」とのこと。

『妖精呪文』の担当はフリットウィック先生。この先生、かなり小さく、映司と頭1つ半違うのだ。

『妖精呪文』の授業は杖を振り回すだけじゃないのだ。最初は魔法の呪文を唱える為に発音の練習をしたり、呪文を造り出した偉人達のことを話したりするのだ。まあ、マグルで言う国語の授業である。

アंक曰く「小っさ!」とのこと。

では、1つの授業を覗いてみよう。

『変身術』の担当は、グリフィンドールの寮監である、マクゴナガル先生だ。『この先生は絶対に逆らっちゃいけない』。と思っていた映司だったが、授業初日から思った通りだった。

「私の教える変身術はホグワーツで最も危険なものです。遊び心が混じって私の授業を受ける人は教室から出ていってもらいますし、二度と教えることもありません。ですから、心して授業に取りかかるように」

と、厳格な表情で告げられれば、誰しも気を引き締めた。1人を除いて…

「まったく、映司！鬼の3倍sk…

「アंकウウウウウツ！」

映司のアップパーでアंकは天井に頭から埋まった。映司はにっこり微笑むと、マクゴナガルに一礼した。

「すみません。バカが迷惑を掛けました。どうぞ、授業を続けて下さい」

マクゴナガルを含め、生徒全員の目や口がパクパクしていたのは…言うまでもない。

肝心の授業だが、マツチを針に換えると言う授業で、出来たのはハーマイオニーだけ。マクゴナガルはそのことを3回も褒めた。

「えい！」

映司が魔法をかけると、マツチは銀色の針に変わる。

「ですから……おや？ミスターヒノ！あなたも出来たのですか。少し見せて下さい」

マクゴナガルは映司の針を手にのせたり、指で弾く。暫くして、映司の前に置いた。

「ミスターヒノ、なかなかの出来です。しかも、混じりけのない純正の銀なんて」

その言葉を聞いて、クラス全員が総立ちになり、映司の針を触る。

「すげー！」

「これが銀なんだ！」

と、生徒は映司の銀の針を触って騒いでいた。

side・夕食

いろいろな授業を受けていくうちに、もう気づけば3日目の夕食になっていた。

「ハーマイオニーちゃん、怒らないでよ」

「エイジ、だってあの人達が女子の風呂を覗こうとしたのよ！？許せないわ」

夕食前に一年生の男子の大半が女子の風呂を覗いたのだ。幸い、先生には見つからなかったものの、映司、ハリー以外の男子が鼻血や興奮して頭を床に打ち付け、医務室に行っている。

「でもね、ハーマイオニーちゃん？男子は女の子のお風呂を見て大
きg..」

「映司！人がアイス食ってる横で下ネタいうんじゃない！」

アंकの右手が映司の頭を掴み、思いっきりテーブルに叩きつけた。

「ずびばぜんでじだ（すみませんでした）」

シチューまみれの顔で映司が謝ると、ハーマイオニー吹き出し、大笑いした。それに釣られて、アंकも満足げに笑った。

「テルジオ 拭え！」

映司の顔についたシチューをハーマイオニーは魔法で拭った。それを見たアंकはふと考えた。

「魔法つてのは体力の消費はないのか？」

ハーマイオニーは少し考えてから話した。

「うーん…その部分はよくわからないけど、妖精の力を行使して魔法を発動するから、あまり体力とかに影響は無いんじゃないかしら？」

「随分と便利だな。魔法つてのは」

アंकは苦々しく台詞を吐くと、アイスをかじった。映司はそんなアंकを見た後、話を変える為にハーマイオニーに語りかける。

「ねえ、日曜日って開いてる？」

ハーマイオニーは首を傾げながら「開いてるわよ…」と呟いた。映司は安心した表情になり、ハーマイオニーの両手を掴んだ。

「勉強教えて！」

ハーマイオニーは拍子抜けしたように、肩を落とした。だが、アंकがそんなハーマイオニーの姿を見てニヤリと不適に笑った。

「映司、日曜日は…」

ハーマイオニーの顔が青ざめ、映司は小首を傾げる。

「アイス買いにフリットウィックのチビと出掛けて来る。勝手にしろ」

「ああそう。お金はあんのか？」

「安心しろ。金はフリットウィックのチビ持ちだ」

と言うとアंकは立ち上がり、わざとハーマイオニーの後ろを通り、耳打ちする。

「このバカ（映司）は筋金入りの鈍感だ。せいぜい頑張れ」

と言うとアंकは去っていった。

「……で？日曜日は？」

映司に問いかけても、ハーマイオニーは顔を真っ赤にして硬直したままだった。

「ハーマイオニーちゃん？」

（日曜曰…ってことは、映司と二人きりってこと？）

ハーマイオニーは脳内は暴走していた。

「ハーマイオニーちゃん？」

『タカカン！』

映司はタカカンドロイドでハーマイオニーをつつく。

「痛いっ！な、何？映司？」

ハーマイオニーは大慌てで問いかける。

「にちようび、開いてる？」

「勿論！開いてるわよ」

ハーマイオニーは即答した。映司はそれを聞いて安心したように

6枚目【蛇と魔法薬とお届けもの】9月 金曜日

金曜日の朝はハリーはロンと映司にとって、記念すべき日になった。大広間まで、迷わずに行けたのだ。

「今日の授業ってなんだっけ？」

ハリーはオートミールに砂糖を振りかけながらロン尋ねた。

「スリザリンの連中と合同の魔法薬学さ。スネイプはスリザリンの寮監だから、スリザリンを贖するってみんな言ってるよ」

「マクゴナガルがグリフィンドールを贖してくれればいいのに」

ハリーが愚痴を溢した。その時、天井を無数のフクロウが天井を飛ぶ。その中にハリーのフクロウ、ヘドウィグもいた。ヘドウィグは今まで一度も手紙を持って来たことはなかったが、たまにやって来てはハリーの耳をかじったり、トーストをかじったりして、他のフクロウと共に去ってゆく事があった。だが、今日はハリーにとって始めての手紙を置いて、去っていった。

「誰からだろ？」

ハリーが封を切り、手紙を見た。

『親愛なるハリーへ

今日の午後は授業がないはずだね。3時ごろお茶でも来ませんか？君の最初の週がどうだったか聞きたいです
ハグリッドより』

ハリーの憂鬱な気持ちはハグリッドの手紙によって大分和らいだ。ロンから羽ペンを借りるとすぐさま『喜んで』と書き、ヘドウィグの足に結んだ。ヘドウィグはまるで「任せてよ！」と張り切るように、ハリーの指を甘噛みして、飛び去っていった。

side・日本

5日前、日本にある鴻上ファウンデーションの地下。鴻上光生は静かに資料を読んでいた。キー造りに飽きた暇な時は、必ずこの資料庫に通うのだ。但し、普段は仕事も多い為、あまり時間は無いのだが。とにかく、彼は熱心に資料を読み、何かを紙に書いた。

「…やはりあの時から20年の誤差が出来ているのか。どうにか元に戻さないかね」

鴻上の言う誤差。それは今から1年前に起きた800年前の錬金術師ガラが起こした歴史を狂わせる実験。その実験のせいで、ヨーロッパの一部の地域では他と比べ、20年も誤差が起きているのだ。

「しかも…ガラが死ぬと死んでから1年後に自動的に暴走するのか。厄介極まりないね……」

（こう言った出来事は普通は時の列車にのる怪物達が良いのだが、諸事情で…）

しかも、下手をすれば世界の歴史が狂うかもしれない。だが、鴻上は焦っていないかった。この現象は7年ごと（時の移り変わりだけ）

に起こる為、どうにかなる。問題は世界の地理が変わることだった。下手をすれば、東京タワーの隣にエッフェル塔が並んでしまったり、北海道の半分がグレートブリテン島になるかもしれないからだ。

「さて…どうするか」

鴻上はじっくり考えた。暫くして、手近にあった電話で、秘書の里中を呼び出した。

「里中君、少しイギリスに観光に行ってきたくれ！」

普通はいきなりイギリスに行けと言われれば誰しも驚くだろう。しかし、里中は表情を変えずに切り返した。

「会社のお金を自由に使っていいなら良いですよ」

里中がそら恐ろしいことを言ったにも関わらず、鴻上は笑っていた。

「素っ晴らしいっ！好きなだけ使ってくれたまえ！お金など、あっても使いきれないんだ。社員に給料をあげても、皆が満足してるのか、中々お金が無くならなくてね」

鴻上はその後で「ただし…」と付け加えた。

「後藤君、伊達君、泉姉妹も連れて行ってくれたまえ」

「わかりました。出発は？」

「君の好きにしまえ」

そう言つと、鴻上は電話を切った。

side・アंक

アंकは芝生の上で寝転んでいた。普段なら映司と一緒に授業を受けているのだが、何故か今日は芝生の上にいた。

「薄くヤミーの気配がするが、こつやつて魔法があると、厄介だな。相手が離れるたびに気配が薄れて、後がつけられねえ」

ホグワーツには様々な魔法が複雑にかけられている為、ヤミーの気配が消えやすい。また、ヤミーを自動感知するタイプのカンドロイド（ウナギ、ゴリラ）も、誤作動を起こして使い物にならない。

「つち！頼りになるのはメダルの音だけか…」

アंकは苦々しく台詞を吐くと、アイスでなく、ペロペロキャンディを舐める。

「まあ…気長に待つか……」

そう言つとアंकは横に芝生に寝転び、目を瞑った。

side・ハリー

魔法薬の教室は地下牢の一角にある。ここはどの教室よりも寒く、暗く、薄気味悪い。そう感じさせるのは、ビンの中でホルマリン浸けにされた、様々な生物がいるからかもしれない。そう考えている

と、教室のドアが開き、スネイプが入って来た。

「静かにしたまえ……」

スネイプは入って来るなり、そう言うと、出席簿を取りだし、出席席を取ってゆく。暫くして、ハリーの手前に来ると、嫌みっただしく笑った。

「ああ！さよう」

猫なで声だ。

「ハリー・ポッター。我らが新しい……スターだね」

スリザリンの生徒がせせら笑った。この瞬間、ハリーは思った。スネイプはハリーを嫌いなんていうものでなく、憎んでいるということに。

「この授業では、杖を振るなどというバカげた事は行わん。これでも魔法かと、思う生徒も多いだろう。フツフツと沸く大釜、ユラユラと立ち上る湯気、人の血管の中を這い巡る液体の繊細な力。名声を瓶詰めにし、死にさえ蓋をする方法である。まあ、諸君らがこれまで教えてきたウスノロよりましであればの話だが……」

スネイプは何も言わなくても、人を惹き付ける話術があった。大演説の後、誰もが黙りこくっていた。

「ポッター！」

突然スネイプに名前を呼ばれ、ハリーがあたふたしていると、ス

ネイプは追い討ちをかけるように問題を出して来た。

「アスフォデルの球根の粉末にニガヨモギを煎じたものを加えると何になるか？」

ハリーは全くわからなかった。スネイプはうつすらと口の端に笑いを浮かべていたが、ハリーは構わず答えた。

「わかりません」

スネイプは鼻を鳴らした。ハーマイオニーが手を上げているのをわかっていながら、舌打ちした。

「ちっ！ちっ！ちっ！有名なだけでは話しにならないらしい」

スリザリンの生徒達がせせら笑い。1人を覗いて。

「先生！ミリセントが！」

「どうした？ブルストロード、具合が悪いのか？」

マルフォイが尋ねると、突然、ブルストロードの体が裂ける。

「きゃあああああつ！」

ミリセントの体からオレンジ色の蛇のような怪物が姿を現した。

「何だあれ！」

ロンは身を乗り出して怪物を見ようとするが、他にも席を立った人がいて、中々見えない。

「下がれ！諸君らに相手は無理だ。私がやるう」

スネイプは動こうとしない怪物に魔法を放つ為、杖を抜き、杖を振るうと手首を動かそうとした瞬間、怪物は体を捻った。その瞬間、スネイプは黒板に勢いよく叩きつけられ、黒板は粉々に砕け、スネイプは頭から血を流し、ズルズルと落ちてゆく。

「そんな…スネイプ先生が…」

「嘘だろ！？」

「殺される！」

恐怖で騒ぎ、泣き出す生徒。そんな中、1人だけ冷静に怪物を見据える人がいることに誰も気づかない。それは…

「落ち着いて！」

映司の叫び声で、生徒達は映司のほうに向き直る。映司はその中で、『まだまとも』な生徒の名前を呼び、指示を出す。

「ハリー君！マクゴナガル先生を探して呼んできて！ハーちゃんは医務室の先生！ロン君は、誰か他の先生を！」

「…わ、わかった！」「…」

3人は返事をする、駆け出す。映司はヘビヤミーを睨みながら、他の生徒に指示を出す。

「俺がこいつを引き付けてる間に、皆は逃げて！文句言ったら…ピ

ーブズをけしかける！」

生徒に有無を言わせないように映司が叫ぶと、スリザリンは既に逃げ、グリフィンドールの数名が残っていた。

「エイジ、君は？」

「死ぬ気なの！？」

ネビル・ロングボトムやシームス・フィネガンなど、他のグリフィンドール生が映司に問いかける。

「もし、先生が間に合わないときは…そうするかもね。けど、これは無駄死にじゃないから…」

映司はヘビヤミーの尻尾の攻撃を爆転で避け、後方に下がる。

「早く！」

映司が怒気を含ませて言うと、グリフィンドール生は部屋から出ていった。

「お前を喰ってやる！」

ヘビヤミーは尻尾を巻き、バネを作り出すと、それを利用し飛ぶ。

「噓！つか、ヘビはいやああああっ！」

映司は手近な大鍋を握ると、それを振り回す。すると、運よくヘビヤミーに当たり、ヘビヤミーは壁に叩きつけられる。

「よし！」

映司はこのすきに部屋から出て、杖を取り出し、扉の鍵を閉じる呪文を唱える。

「エイジ、やったの？」

「ううん。とりあえず閉じ込め え？」

映司は不思議な感覚を覚えた自分の右手に感覚が無く、更に血が溢れ出ていた。暫くして気づいた時は遅かった。ヘビヤミーが腕に噛み付き、自分を床に叩きつけた事に…

side . アンク

メダルの音に気づいたアンクは城内を走っていた。

（映司の奴！忘れていきやがって！）

アンクはドライバーを右手に持ち、走る。すると、そのアンクと並走するフクロウがいた。そのフクロウはアンクの前に箱を落とす。

「なんだ！？この箱！」

アンクは箱を開ける。箱の中身は黒地に青のラインとクリアブルの刃を持った片刃の剣。

「っ！…あのやろっ」

アンクは箱の蓋を閉じると、一気に駆け出した。

次回

【狡猾と牙とタカトラーター】

7枚目【狡猾と牙とタカトラーター】 9月（前書き）

これまでの【ハリーポッターと賢者の石 with 仮面ライダー
オーズ】

前回までの3つのあらすじ

1つ、ロンとハリーは始めて迷わないで大広間に行く。

2つ、魔法薬学の先生は嫌みたらしくハリーに問題を出す。

そして3つ、生徒の欲望でヤミーが誕生する。

count the medals!

現在、オーズの使えるメダルは…

タカ

トラ

バッタ

ゴリラ

7 枚目「狡猾と牙とタカトラーター」 9 月

ヘビヤミーは映司や他の生徒を見る。実際に見ているのは喉の辺りにある人の顔をした部分だが、映司達にはどうしても蛇が睨めるように見えた。

「エイジ、大丈夫か？」

噛まれた右腕から血は流れ続ける。1年生である為、誰も治癒の魔法を知らない。加えて、目の前には蛇。背を背ければ絶対に襲われる。そんな恐怖が辺りを覆っていた。

（オーズドライバーを部屋に置いてくるんじゃない…）

映司は右腕を庇いながら、立ち上がると、腰のポーチを手取る。

「やるしかない……か」

映司は青いカンを取り出すと、プルを開ける。それはウナギカンドロイドに変形する。映司はそれらを4体出し、ヘビヤミーに向かわせる。4体のウナギカンドロイドはヘビヤミーの体に巻き付き、電気を流し、麻痺させようとする。しかし、ヘビヤミーはまるで効いていないかのように、無言で歩き出した。

「蛇は嫌いって、言ってもらえないし」

映司の顔は心なしか青ざめていた。血が抜けたのと、大嫌いな蛇を前にしたからかもしれないが、それでも映司は他の生徒達が傷つかないよう、矢面に立つ。

「どうにか…皆だけでも……」

映司はヘビヤミーから皆を逃がす方法を考えた。その時、一羽のフクロウが映司の足下に箱を落とした。

「映司！」

振り返ると、そこにはアंकが立っていた。

「何の為に渡したかわかってんだろうな！？ったく、俺に手間取らせんな！」

アंकは文句を言いつつ、オーズドライバーを投げ渡す。映司はそれを受け取り、腰に装着する。

「アंक、チーターある？」

タカ、トラをカテドラルに詰めながら、映司は尋ねる。すると、無言でチーターが投げ渡される。映司はキャッチするとメダルを詰め、カテドラルを傾け、スキヤナーを起動させる。

「アंक、広くて闘いやすい場所は？」

「無え！そこでどうにかしろ！」

ぶつきらばうに言われ、映司は苦笑しながら、カテドラルに沿わせ、スキヤナーでメダルをスキャンする。

「変身！」

「タカ！トラ！チーター！」

オーラングサークルの下部の意匠がチーターになり、脚部は走力に特化したチーターレッグ。数ある亜種コンボの1つ、タカトラーターに変身する。

「エイジが…変わった!？」

「格好いい！」

生徒達から歓声が上がる中、オーズはトラクローを展開する。

「中身は…っと！」

タカヘッドの能力『透視』を使い、ヘビヤミーの中に取り込まれているブルストロードを見る。

「成る程ね…大体わかった！」

オーズは腰ために構え、駆け出す。次の瞬間、オーズは一瞬でヘビヤミーの後ろに現れる。

「エイジが…一瞬で？」

「後ろに…」

「現れた!？」

「すごい！」

生徒が声をあげつつも、オーズは襲い掛かってきたヘビヤミーの噛み付きをスレスレに避け、再び後ろに回り込む。

「場所はわかってても、攻撃しづらいよな…しかも、固い甲羅みたいなものにくるまれてるし…」

蛇は卵から生まれる。これは常識だ。このヘビヤミーもブルストロードの持っていた卵から生まれた。しかし、卵から孵るとすぐに親であるミリセントを呑み込む、つまり、食べてしまうのだ。そして、ヤミー自身はブルストロードの姿に変化する。そして、呑み込んだブルストロードの欲望が歪んだものになると、怪物の姿に変化し、呑み込んだブルストロードはヤミーの体内で卵にくるまれ、死ぬまで欲望の製造器となる。

閑話休題

オーズはヘビヤミーにトラクローですれ違いざまに振り下ろす。しかし、ヘビヤミーの皮膚はゴム質のように弾力性があるため、弾き返され、体勢を崩す。そこへ、ヘビヤミーの噛み付きが繰り出される。だが間一髪、ギリギリで回避（というか倒れこんだだけ）し、やり過ごす。

「下手に突き刺すわけにもいかないし…」

オーズは走り、距離を取る。再び箱の前に戻ってくる。すると、アंकが箱を指差してきた。

「映司、その箱開けろ！」

「これ？わかった」

オーズは指示どおり箱を開ける。中身は赤い布が敷き詰められ、片刃の剣が入っていて、その上にバースデーカードが入っていた。オーズはその手紙を開く。

『火野君、君にプレゼントだ！』

その剣は新型だね。バースのセルメダルの運用データと君の戦闘データを合わせて作ったものだ。その為、以前の三倍の切れ味を誇る。バースの運用データは、ヤミーと人間を分離させるのに使えるから入れたんだよ。それからコアメダルでも運用可能にした。使ってくれたまえ。

追伸。ライドベンダーをホグワーツに送るから使ってくれ。では、ハッピーバースデーッ！』

オーズは手紙を箱に戻し、剣 メダジャリバーを手にする。

「鴻上さん…ありがとう」

オーズはメダジャリバーを片手に持つと、チーターレグで加速する。そして、すれ違いざまにメダジャリバーで切り裂く。すると先程までトラクローが弾き返されていたのが嘘のように、ヘビヤミーの傷口からセルメダルが溢れ出る。

「へえ〜書くだけあるな」

オーズは切れ味に驚きながらも、オーズはすかさず振り返り、キックを放つ。ヘビヤミーは体勢を崩したところに、メダジャリバーの剣戟を素早く浴びせる。大量のセルメダルが切り口から溢れる。

「はっ！セイヤア！おりゃあっ！」

ヘビヤミーの体を切り裂いてゆく中で、その体の中に一瞬だが、白い壁のようなものがあるのをオーズは確認した。

「流石にあれば斬る自信ないな……仕方ない」

オーズはヘビヤミーに強戟を与えて、吹き飛ばす。暫くして、ヤミーが体勢を立て直したのを見計らって、再び走る。そして、最大加速に到達した瞬間、一気に飛ぶ。加速した勢いのまま放たれた蹴りは、物凄い速さで中空を飛び、ヘビヤミーに当たり、ヘビヤミーごと中空を流れてゆく。その間に、オーズはヘビヤミーに組み付き、脚力を最大にいかし、メダルを掻き出してゆく。ヘリボルスピンキックを繰り出す。すると、ヘビヤミーの体からひび割れた白い卵のようなものが出てくる。それは、地面に当たると砕け、中からブルストロードが出てくる。

「よし！」

オーズはヘビヤミーを蹴り飛ばして、地面に着地すると、床に投げ棄てたメダジャリバーを手に取り、セルメダル3枚をスロットに入れ、レバーを押す。そして、オースキャナーでメダルをスキャンする。

《トリプル！スキャニングチャージッ！》

オーズは城の被害を最小限に食い止める為に、走りだす。苦しみがヘビヤミーにすれ違いざまにメダジャリバーを一閃させる。そして、トラクローをアンカーのように地面に突き立て、減速させる。その直後、ヘビヤミーは爆発し、残りのセルメダルを地面に落とす。てゆく。

「うおっ！」

メダジャリバーに吸い寄せられるかのように、落下したセルメダルは吸い付いてゆく。

「重ッ！」

あまりの重さに思わずメダジャリバーを落としてしまう。アंकは生徒にはれないようにこっそり近づくと、右腕でセルメダルを呑み込んだ。

「上場だなあ」

アंकは不適に笑うとオーズに差し伸ばす。オーズはその手を取り、立ち上がる。そして、カテドラルを水平に戻し、変身を解除する。

「痛たっ……」

右腕は流れ出た血で紅く染まっていた。映司は右手の痛みを堪えて立ち上がる。

「映司、ありがと！」

生徒達が駆け寄り、映司に感謝の言葉を述べる。

「大丈夫な、ようじゃな」

声のするほうに目を向けると、そこにダンブルドアが立っていた。

「ミスターヒノ、医務室にお行き。ミスターアंक、付き添いを」

映司は頷くと、右手を左手で支え、医務室に向かった。

「さて、君達は…今起きた出来事…ミスターヒノが闘ったことを黙って貰えるかの？あゝ、出来れば、儂が怪物を倒したと…いうことにな」

ダンブルドアが生徒に尋ねる。すると、パーバティが尋ねた。

「何ですか？エイジの功績を利用するんですか？」

ダンブルドアはの言ったクスクス笑いながらその問いに答えた。

「違うよミス。儂は彼になるべく静かに学園生活を送ってほしいから、そうしとるんだよ。実はこの事は彼と事前に話しあって決めたことだからね」

ダンブルドアは朗らかに笑った。パーバティは申し訳なさそうに頭を下げた。

「さて、怪我したものは医務室に。それ以外のものは昼食に行こうかの。今日は美味しいエッグタルトがあるんじゃないよ」

ダンブルドアが促すと、何人かの生徒のお腹が鳴った。ダンブルドアは頷くと、静かに去っていった。生徒達は不安げな足取りで、その後に続いた。

映司はマダムポンフリーから「こんなに血だらけになって！暫く安静にしてなさい！」と言われた為、映司は仕方なくベッドに横になっているしかなかった。回りをみれば、頭に包帯を巻かれたスネイプがベッドに横たわっていた。それ以外のベッドは空だった。

「はぁ…暇だな」

映司はベッドから起き上がり、箱に隠したメダジャリバーを手にする。そこで、ふと、思った。

「もしかして…メダジャリバーっていつも持っていないと駄目？」

勿論、箱に入れてだ。が、箱を持ち歩く何て言うバカげたことをすれば、確実に箱を開けられ、メダジャリバーを遊び半分で使われてしまう。

「うゝ……メダジャリバーぐらいの大きさの目立たないものか…」

映司は考えるが、思い付かなかった。

「まあ、仕方ない。明日考えよ」

映司は考えを切り替え、横になった。すると、久しぶりの変身で疲れていたのか、映司はすぐに眠りに落ちた。

side.?

混雑した空港のロビーを抜け、一向は入り口から外に出た。日本と違い、どこを見渡してもそこには白人しかない。

「イギリスって初めて」

「僕もだ。後藤くん、君は？」

「俺もです。泉さん。」

泉比奈が呟き、兄である信吾がそれに同意し、後藤に問いかけ、後藤がそれに応じる。

ちなみに、2人の間柄は信吾が上司と後藤が部下であるが、親しい間柄であるため、あまり堅苦しくならないようにしている。

閑話休題

「私は3回目です」

何故か、バスガイドのコスプレをした里中が呟いた。

「里中ちゃん、早くいかない？」、

伊達はミルク缶を背負いながら、促した。

「そうですね。あ！比奈さん。火野さんには後、2日か3日会えませんよ」

比奈の顔に赤みが増した。

「比奈、映司君となら付き合ってもいいぞ？」

信吾がからかうと、比奈の顔がリンゴのように真っ赤に染まる。

「まあ…火野って、鬨いとかにかんしては、冴えてるって言うか、したたかなんだけど、恋愛面…もとい、女性関係は転で駄目なんだ

よな」

と伊達はため息を溢した。

「わ、私、映司君とは、そんな関係にはっ！な、なりたくっ……」
「あ！火野だ」

その一言で比奈はファイズもびっくりな速さで振り返る。

「比奈、今の反応でわかった。もう何も言わない。何も」

信吾は比奈の肩に手を置いた。比奈はからかわれた事がわかると、両手で顔を覆った…………

次回

【勉強と本とお姫様】

その力、掴み取れ！

ヤミー図鑑

名前：ヘビヤミー

種類：爬虫類

属性：毒

誕生：親に卵を温めさせ、生まれる。卵から孵ると、親を飲み込み、

自身はその親に擬態する。その後は自由自在に怪物と擬態に変化する。

8枚目【勉強と本と泣き虫お姫様】 9月 日曜日（前書き）

count the medals!

現在、オースの使えるメダルは：

タカ

トラ

ゴリラ

バッタ

チーター

8枚目【勉強と本と泣き虫お姫様】 9月 日曜日

夜：右腕の痛みも無くなり、映司は紙にシャープペンシルで何かを書いていた。それは詩。旅をしているうちに、音楽に乗せて口ずさめる詩を書くようになった。

「ふう…こんなもんか」

映司はノートを閉じると、詩を書くのを止めた。そして、時計を見る。時計は深夜2時を指していた。

「そっか…もう日曜日か」

映司は腕の怪我を治すのに『ブルックリンの危険な傷治し』を使った。この薬、凄い治りが早いのだが、副作用が強い。その副作用は睡眠作用が激しいこと。その為、映司は1日と半分も眠っていたのだ。

「そっといえば、ライドベンダーが配備されるって言ってたけど、どこにあるのかな？」

映司はベッドから起き上がると、扉の近くにある棚の上にある退出許可願いに自分の名前を書くと、こっそり抜け出した。

「う…暗い」

映司は壁伝いでなんとか歩く。途中、何度も石像や甲冑にぶつかりそうになりながら、映司は交差点にたどり着く。

「どつち？」

映司は悩みながらも、右に曲がる。すると、普段は見慣れない四角い『何か』が置いてあった。

「う？これ……」

「ああ！ミスターヒノ！腕の怪我は治ったようですね」

振り返ると、そこにはマクゴナガル先生がいた。

「はい。おかげさまで。すみません。ご心配をお掛けしました」

「いえ。」

マクゴナガル先生は珍しく微笑んだ。

「ミスターヒノ、これはダンブルドア校長が新しくお買い上げになった、『買い物箱』」

「先生、『自動販売機』ですよ」

マクゴナガルはコホンツと咳をした。

「まあとにかく。この箱の設置をしていたのです。ミスターヒノ、これはマグルの製品ですが、使い方はわかりますか？」

映司は頷くと、財布を取り出す。シッケル銀貨2枚（日本円にして137円）をスロットに入れる。

「お金を入れたら、好きな飲み物の所のボタンを押すんです。こん

な感じで」

映司は緑茶を選ぶとマクゴナガルに渡した。

「これは！！日本の緑茶ですね！？実は前から飲みたいと思っていたのです」

マクゴナガルはペットボトルの蓋を開けるのに苦戦しながらも、なんとか開き、飲む。その瞬間、マクゴナガルは頷いた。

「苦味の中にある仄かな甘み。私が想像していた味です。ミスターヒノ、ありがとう。グリフィンドールに10点」

映司はこんなことで点を貰っているのか迷ったが、何も言わないでおいた。

「さて、貴方は寮に戻りなさい」

映司は寮に戻る為に道を引き返した。

side・朝

ハリーは談話室から聞こえてくるざわめき声で目を覚ました。よろよろと談話室に歩いて行くと、そこには白地に四角い箱が置いてあった。

「ハリー、これなんだい？」

ロンが尋ねて来たがハリーにも検討がつかなかった。すると、ハリーマイオニーがよく通る声で説明し始めた。

「それはジャッポーネ（日本）にある、自動販売機というもので、中にジュースが売られているのよ」

皆が頷いていると、映司が自販機の前にやってきた。

「ふあゝふ。ごめんね」

映司は慣れた手つきで財布からお金を取りだし、自販機に入れ、ボタンを押した。『ガコンッ』鈍い音が響いて、下の取りだし口に映司は手を入れ、缶コーヒーを取り出した。その瞬間、映司はパーシーや他の生徒に詰め寄せられた。ハリーやロンはどうやら出てきたのか、検討もつかない為に、自販機のボタンを押すが、全く反応がない。暫くして、解放された映司は、機械の説明をしていく。ちなみに、映司の説明の後でフレッドとジョージが面白がってその自販機にお金を入れて『C レモン』買い、飲んだところ、「旨い！」「カボチャジュース？時代遅れだね。今はこいつの時代さ！」

と高らかに宣言した。その瞬間、興味を引かれた生徒は我先にとその『C レモン』を買おうと自販機に食いついた。

暫くして…

「ハリー、マグルってこんな美味しいの毎日飲んでるんだな」

ロンがC レモンを飲みながら羨ましげに呟いた。

「ロン、マグルじゃなくてジャッポーネが凄いだよ」

とハリーは呟いた。

side .

朝食の席で、自動販売機の話が出ると、生徒（スリザリン以外）は朝食終了後に、ホグワーツ内部11台、クイディッチ競技場に2台、フクロウ小屋に1台、計14台置かれた自販機は全て、ジュースを買う人で溢れかえっていた。しかし、普段なら絶対に買いに行かはずの生徒が、一人だけ行っていなかった。彼女は男子寮の扉の前で、荷物を抱えて立ち尽くしていた。

（えっと……髪は大丈夫かしら？）

縮れ毛はもともとなので諦めているが、変に寝癖がついてないか心配になり、櫛で髪をとかす。

（髪は大丈夫ね。後は…）

ハーマイオニーは自分の胸に手を当てた。すると、ドアが開いた。ハーマイオニーはびっくりして、声を上げる。

「ごめんね。待った？」

映司は苦笑いしながら出てきた。ローブは休日だから着ていない。

「い、今着たところだから、大丈夫よ」

ハーマイオニーは恥ずかしさを隠すのに必死で思い付いた言葉を呟いた。

「そつか…そうそう、図書室って空いてないんだって」

ハーマイオニーのテンションは今まで観覧車の1番上にいたような感覚だったのが、一気に下がっていった。

「そ、そう。どうしましょうか」

ハーマイオニーが平静を装って尋ねると、映司は不適に笑った。

「俺と…する？」

「は？」

ハーマイオニーは聞き返した。

「な、何をするの？まだ私達、そういう年齢じゃな」

「あの…俺の部屋で勉強しない？って言ったんだけど？」

ハーマイオニーはびつくりした表情になった。確かに映司の部屋に入るのは嬉しいが、それは校則を破るように感じた。

「校則には書いてないし、大丈夫でしょ？それに、今はみんな、ジューズに夢中だし」

映司は談話室に目を向けた。

「わかったわ」

ハーマイオニーは意を決して頷いた。映司は扉を開け、ハーマイオニーを中に案内した。男子寮は女子と違った匂いがした。部屋は女子同様、壁には部屋に入る為の扉があり、部屋には4〜5人入れるようになっていた。

「俺の部屋はここ」

突き当たりにある扉を開けると、そこにはグリフィンドールのメインカラーの赤は無く、寒々しいほどの白い壁、テーブル、ガスコンロ、食器棚、冷蔵庫、そして…自販機が並んだ、8畳程の部屋だった。

「……1人部屋？」

「そう。ダブルドア先生が気を使って、1人部屋にしてくれたんだ。」

そういつと映司はハーマイオニーに冷蔵庫から出した紅茶をカップに注ぎ、渡した。

「ありがとう」

ハーマイオニーは映司に礼を言うと、紅茶を口に含んだ。飲み込んでから彼女は映司に尋ねた。

「あの……あなたの变身してるものってどんなものなの？あなたの体に異常……とか起こしたりしないの？」

ハーマイオニーは好奇心と心配の入り交じった目を映司に向けた。映司は「やれやれ」といった感じで、溜め息をつく、3枚のメダルと紙とシャープペンシルを取り出した。

「このメダルはオーズに変身するのに必要なのはわかるよね？」

ハーマイオニーは頷いた。

「この色のついたメダルはコアメダル。この場にある赤、黄、緑の3枚のメダル以外にも、灰、青、橙、紫のメダルがあるんだ。コアメダルを造ったのは、800錬金術師」

映司は7つの を紙に書き、内6つに9つの黒い点を書き、残りの1つに3つの黒い点を書いた。

「このメダルの怪物が人間の欲望を利用するグリード。アंकもその1人。まあ、あいつは気にしてないみたいだけど」

「9つのメダルがグリードに集まると、グリードは満たされない欲望を満たそうと、して、人間を襲う。最終的にはその世界の全てが呑み込まれ、消える」

ハーマイオニーは身震いしたが、映司は構わず続けた。

「それを阻止して、グリードを封印するのが、オーズ。メダルにはそれぞれ、頭、腕、足の3種類に分けられて、オーズはその戦況に応じて、メダルを変えて戦うの」

「後、メダルの色が3枚とも同じ色になると『コンボ』って言う、通常の3倍の出力を発揮するフォームになれるんだけど、この話し

はややこしいから後で」

と言うと映司はグリードの説明に戻った。

「グリードのメダルは当初は、5人のグリードしかないから、計45枚しかないはずだった。けど、そこに紫のグリードが現れて、そのうちの五つが俺の体内に入った。それと同時に、オーズも新しい力を手にした。紫のメダルは全てのメダルを砕き、消滅させる能力。だから、グリードのメダルは数が減った。最終的には全部消滅したんだけど…」

映司は苦笑いすると、紅茶を飲んだ。

「で、消滅したメダルのうち、各色3枚ずつがまた造られて俺の手元にあるんだ」

そう言うのと、映司はメダルをポケットにしまった。

「この間、私達を襲ったのって…」

「あれはヤミー。グリードの手下で、人間の欲望から生まれる怪物。グリードの細胞になる、セルメダルを作り出すんだ」

ハーマイオニーは震え上がった。もし、自分の欲望が怪物になったらということを考えるだけで。そんなハーマイオニーの気持ちを察したのか映司はハーマイオニーの頭を撫でた。

「大丈夫。そうならないように、おれも努力するから」

ハーマイオニーは映司に頭を撫でられ、恥ずかしそうにしていた。

「さて……勉強！勉強！」

映司は手を叩くと、ハーマイオニーは、ハッと驚いた表情になっていた。映司は羽ペンを握ると、魔法薬の課題を書き始めた。

side・アंक

アंकは校内の正確な位置を把握するため、歩いていた。ピーブズを引き連れて。

「ピーブズ、しっかり書けよ？でないと、どうなるかわかってんだろうなあ？」

アंकが右手をグリッド化させると、ピーブズは震えながら頷いた。

「アंक様、1階は書き終わりましたよ」

アंकは2階に上がる階段に足をかける。すると、スリザリンとレイブンクローの1団が歩いて来た。

「見て、あれがアंक様よ！」

「やっぱりイケメンね」

レイブンクローの女子から声が上がった。

「見るよあの髪型。鳥の頭みたいだな。チキン君と呼ばうか」

ドラコ・マルフォイがアンクに聞こえるように話すと、スリザリン生はバカみたいに笑いながら歩いてゆく。すれ違い様にアンクはその足に足払いをする。マルフォイは勢いよく階段を落下してゆく。

「ざまあみる」

アンクは鼻血を流して倒れた階下のマルフォイを見下すと、再び歩き出した。すると、壁の所に1人の女の子が泣いていた。アンクは気になって声をかけた。

「おい……どうして泣いてんだ？」

「ふえ？………ウアアアアッ！」

女の子はアンクの顔を見てさらに泣き出した…

9 枚目【槍兵と戦闘狂（バーサーカー）とアंक奮闘】

9 月 日曜日（前書き

これまでの【ハリーポッターと賢者の石 with 仮面ライダー
オーズ】前回の3つの出来事

1つ、学校にライドベンダーが配備される。

2つ、ハーマイオニーは映司からオーズについて聞かされる。

そして3つ、アंकは泣き虫の少女に出会う。

count the medals!

現在、オーズの使えるメダルは：

タカ

トラ

ゴリラ

バツタ

チーター

アंकはとりあえずその女の子に飴を渡した。

「ほら…飴だ。にしてもなんで俺の顔を見て泣く？」

アंकが尋ねると、ピーブズが小声で「そりゃ、あんたの顔や髪型がチンピラに見えるからだ」と呟いた。

「ピーブズ、燃やされたいか？」

アंकは右手に炎を灯す。するとピーブズは焦ったような仕草で、両手を前に出して振っていた。

「ななな、なんでもないです！」

「そうか」と言いつつ、アंकは無情にもピーブズにアッパーを放っていた。

「それで？お前の名前は？」

アंकが少女に尋ねた。

「私は…サラ・オルレイン・S」

少女は立ち上がりながら名乗った。しかし…

「お前、小さいな…」

アंकの腰よりちよつと上の部分に頭がある為、アंकは思わず
呟いた。

「ふえ……」

少女は目尻に涙の粒が浮かぶ。

「あ！え……あ……ほら、飴だ！今度は桃味だ！美味しいぞ」

泣いてる子供のあやしかたを知らないアंकは、アイスの次に
に入っている『キャンディアイス　～アイスのような飴～』の桃味
を与えた。

「ふあふいがほお（ありがと）」

飴を頬張りながらお礼を言った少女を見て、アंकはよくわから
ない不思議な感情を感じた。

（なんだ、このふっわふわした感情は？）

アंकは無意識のうちに自分の胸に手を当てていた。

「ねえ……あなたの名前は？」

サラが呼び掛けるが、アंकは完全無視。自分の感情が何なのか、
疑問に思っただけだ。

「ふえ……」

「あ、アंकの兄貴！名前を教えてあげて下さい！」

ピーブズの声で我に還ったアंकはその感情を隠すように、不適に笑った。

「俺はアंक。グリフィンドールにいる。生徒じゃないがな…お前は何処の寮だ？」

「わ、わたしもグリフィンドール」

アंकは今まで生きて来たなかで一番、驚いた表情になった。なにせ、目の前にいるサラは泣き虫で、とても勇敢には見えない。逆におどおどしていた。

(…『涙』が武器か?)

アंकはそんな考えを払拭するかのように首を振った。

「こんな泣き虫のお嬢ちゃんか？ウソダ！ウソダ！ウソダ！」

ピーブズがやし立てると、少女は再び泣き始めた。アंकは右手をグリード化させると、ピーブズの腹部に思い切り、コークスクリューを叩きこんだ。ピーブズは白眼を剥いて、空中を漂っていた。

「気にすんな。お前がどこの寮かなんて、気にもとめないから…な」

アंकはかつて憑依していた人間の記憶の中にあつた、ある行為を思いだした。静かに元に戻した右手（本来は逆だが）をサラの頭の上に乗せ、撫でていた。サラは驚いた表情でアंकを見た。

「どうして……優しくしてくれるの？」

「さあ……な。俺は人間じゃねえから、よく知らない。だが、放つてもおけないしな（つか、映司が怖いし……な）」

アंकの本心はいざ知らず、サラは目を細めて、アंकの優しさを感じていた。

「姫様！」

声が聞こえた瞬間、サラはビクツとした。だが、アंकはそんな事には驚いていなかった。声をかけた人物を見て、驚いていた。

「姫様、下手に動けば、御母上の知るところになりますよ」

サラは絶望にうちひしがれるかのように、崩れた。アंकはサラの目の前に立つと、ピーブズに命令した。

「ピーブズ、映司を探してこい」

「わかりやした」

ピーブズは壁を通り抜け消えた。アंकは右腕をグリード化させる。

「お前、人間じゃないな。グリードだな」

アंकが尋ねると、男は笑って答えた。

「そう。俺はグリードの1人、ランサーさ。まあ……偉大なるスリザリン家の優秀な執事でもあるんだが……」

と言いつつも、ランサーは右手に槍を出現させる。

「お前達みたいにな、グリードに生らなくても、俺は武器を取り出せるから闘えるんだぜ？チキン君？」

ランサーは見事な片手突きを見舞う。アंकは右手でそれを掴む。

「んゝいい判断だ。だが…」

ランサーが槍を捻ると槍先が外れた。槍を引いていたアंकは慣性の法則で床を転がる。

「おらあつ！」

跳躍し、アंकに槍を突き刺そうとする。アंकはギリギリで回避すると、かた膝を地面についた状態で、右手から炎を放つ。炎は素直すぎるほど真っ直ぐにランサーに向かう。ランサーは槍の1突きでそれを霧散させた。

「やるな。さすが鳥類系グリードだけはあるな。俺達の仲間になる気はないか？」

「ふざけんな。ただのメダルの塊なんかに今更戻れる気はねえ！」

アंकは右手を使い、独特の攻撃を繰り出す。例えるなら、タカが鋭い爪で獲物を取るのと同じように。ランサーは槍を器用に使い、それを払い、突きを繰り出す。だが、アंकは人間の身軽さを生かし、紙一重で避ける。ランサーは、ヒュゝっと口笛を吹いた。

「こいつは…人間体でここまでとは。いいぜ、やってやろうじゃないのぉ！」

ランサーは口元を吊り上げたように笑うと、今までと違ったように早く、鋭い突きを繰り出す。

「毒呀！（ポイズン・ファング！）」

一瞬、紫の液体が地面に落ちた。地面は、じゅっ、と音をあげて溶けた。それを目に止めたアंकは、いなそうとしていた手を、引っ込め、左に横っ飛びに回避する。

「いい目だぜ…ますます仲間になくなって来た。楽しいねえ〜！」

アंकはランサーのそんな言動を聞いたアंकは密かに思った。

（バーサーカー……か）

アंकは右手を後ろにし、溜めを作る。そして、勢いよく前に突き出すと、炎が吹き出した。火の玉でなく、火炎放射で。ランサーは驚いて槍を破棄し、後ろに飛びすさった。

「おいおい、丸焦げにするつもりか！？毒は炎に弱いんだぜ」

と言いつつも、ランサーは再びセルメダルから槍を錬成した。

「さて…いくか」

ランサーは槍を水平に構える。切っ先をアंकの胸に捉えようと、一気に駆け、距離を詰める。その切っ先がアंकに繰り出される。

「っち！なら！」

アंकは再び炎を出す。槍は炎の勢いに押される。2つの力は拮抗する。

「っ！」

「っのおっ！」

その時、ランサーの槍が中程から断ちきられ、同時に、ランサーは炎を受け、吹っ飛び、壁にめり込んだ……

10枚目【鎌と爪と毒呀の罫】9月日曜日（前書き）

これまでの【ハリーポッターと賢者の石 with 仮面ライダー
オーズ】前回までの3つの出来事

1つ、アंकが出会った泣いている少女に飴をあげる。

2つ、その2人の前に爬虫類グリード、ランサーが現れる。

そして3つ、ランサーとアंकは激しくぶつかり合う。

count the medals!

現在、オーズの使えるメダルは…

タカ

トラ

ゴリラ

バツタ

チーター

10枚目【鎌と爪と毒呀の罫】9月日曜日

映司はハーマイオニーと勉強をしていた。ハーマイオニーは先程からインク瓶を溢したり、羊皮紙を破いてしまったりしている。映司は訳を聞かないほうがいいと黙認していた。すると、談話室のほうから、誰かが言い争う声が聞こえた。その直後、壁からピーブズの顔が現れた。どうやら、首なしニツクに羽交い締めになされているようだ。

「映司さん！アंकさんが！2階で！」

その言葉を聞いた直後、映司は棚から布に包まれたメダジャリバーを掴み、部屋を勢いよく飛び出した。ハーマイオニーは一拍遅れて映司の後を追う。

「ピーブズ、アंकは？」

「2階です。少女1人を庇いながら戦ってます」

「ありがと！ピーブズ、ハーちゃんをお願い！」

ピーブズは敬礼するとハーマイオニーをこれないようにする。映司は走りながらドライバーを装着し、メダルを装填する。

「変身！」

《タカ！トラ！チーター！》

一気にトップスピードになると、階段を下り、2階にたどり着く。そこはかなりの温度になっていたが、オーズは気にせず、メダジャリバーを抜き放つ。すると、数メートル先に炎と槍がぶつかり合う

のが見えた。

「見つけた」

オーズは再び加速し、槍目掛けてメダジャリバーを振り下ろした。すると、槍は熱で脆くなっていたのか、容易く斬れた。そして、槍を持った怪物は炎を受けて、吹っ飛んだ。

「速いな…映司」

アंकは不適に笑いながらやってきた。

「アंक、選手交代。お疲れ様」

そう言うつと映司は、足をバツタに替える。

《タカ！トラ！バツタ！》

《タットバ！タトバ！タットバ！》

メダジャリバーを肩に担ぎ、敵に斬りかかる。敵は手にした槍でそれを受け止めた。

「お前がオーズね。俺は爬虫類系グリードのランサーよろしく！」

ランサーは名乗る。オーズはつばぜり状態から離れ、距離を取る。

「ふうん……なかなか」

ランサーは再び水平に槍を構え突っ込んでくる。オーズはメダジャリバーを構える。

「槍は打撃と刺突！これが出来れば怖いもんはねえ！」

まさに槍襖ふすまとっていいほどの素早い突き。オーズは弾くのがや
つとで、動けずにいた。

「どうした？これで終わり？」

その瞬間、ランサーは吹っ飛んでいた。それはすぐにわかった。
オーズはメダジャリバーで突きを放ったのだ。しかも、突きと突きの
合間を縫って。僅かな時間しか無い中で。

「生憎、目はいいほうなんだ。今度はこっちからいくよ？」

メダジャリバーを構え、斬りかかる。ランサーはその1太刀を槍
で受け止める。そこに、左手のトラクローが放たれる。ランサーは
それを受け、鑪を踏む。すかさず、蹴りが放たれ、ランサーは地面
を転がる。

「鳥ちゃん（アंक）もやるけど、オーズもなかなか。こりゃ、本
気で行きますか」

ランサーは姿を人間から、ワニ、カメ、ヘビの混ざった、グリー
ド体に変化する。

「はあっ！」

ランサーは両手に1本づつ、計2本の槍を構えると、器用に使う。
オーズはメダジャリバーとトラクローを使い、器用に捌き、いなし
てゆく。互いに1歩も譲らない戦いになっていた。

「はあ！」

「おっと！」

冗談から振り下ろされた一撃は、2本の槍に受け止められる。そして、押し退けられた。体制を崩した瞬間、そこに2本の槍による突きが襲い掛かる。オーズは火花を散らし、地面を転がった。

「はあっ…はあ…」

地面に膝をついた状態で、息を整える。

「アंक、あいつ…」

「ああ。単純な力だけなら俺達以上だ。だが、槍をどうにかすれば」
後は簡単。理解した映司にアंकがメダルを渡してくる。

「あ…これ…」

渡されたのはカマキリ。それだけならわかる。だが、もう1つ渡してきたのはアंकのコアメダルの1つ、コンドルを渡してくる。

「あいつに勝つ為だ。手段は選ばないからな」

オーズはメダルを入れ替え、スキャンする。

《タカ！カマキリ！コンドル！》

オーズは両腕のカマキリソードを展開し、接近して来たランサー

にオーズはカマキリソードを振るう。槍にぶつかり、ガキンツという金属音と共に、火花が散る。オーズはすかさず、コンドルレックによる蹴りを叩き込む。目にも止まらぬ速さで放たれたそれは、旋風刃を纏いながら、ランサーを切り飛ばす。

「がふっ！」

体制を崩したランサーに、カマキリソード、コンドルレックによる乱舞を叩き込む。斜上下左右、全ての方向から放たれる斬撃により、ランサーの体からセルメダルが溢れ出る。

「はあああっ…セイヤアーツ！」

エネルギーがラインドライブをかいし、カマキリソードに送られ、斬撃を放つ。

「がはあああああっ！」

セルメダルを撒き散らしながら吹っ飛んでゆく。そして、その中にオレンジに光る物が気を失ったサラの胸元に入っていた。

ランサーは地面から起き上がると、不適に笑った。

「うち…やるねえ。俺の敗けた。あ…そうそう。1つ小話しとか…俺は昔、スリザリン家の執事だった。今はシュドルク家だが…その俺はある実験でグリードになった。この意味がわかるか？」

問いかけるランサー。すると、アंकと映司が理解したのか、言葉を呟いた。

「人間だったって事？」

「そ。ま…それはそれとしてだ…。俺達は純粋なグリードじゃない。それが言いたかったただけだ」

ランサーはそう言うと、消えた。

「人間から…グリード」

「確かに。グリードにしては、随時と人間臭かったな」

アंकは腕を人間に戻す（何度も言うが、普通は逆）。オーズも変身を解除する。

「はあっ…はあっ…（今、俺がこうしてられるのは、偶然なのかも…）」

映司は地面に座りこんだ。

映司はかつて紫のコアメダルを体に取り込み、グリードと化した。その時の事を考えると、今でも悪寒が走る。

「…い映司！おい映司！」

アंकの声で映司は思考を元に戻す。

「どうでも良いが…お前、避けないと鼻が折れるぞ？」

「え？」

「エエエエイイイジイイイツ！」

ハーマイオニーが叫びながら駆けってくる。しかも、アクセルトライアルもびつくりな速度で。そのまま突っ込んで来た。映司は地面を転がり、頭をぶつける。

「大丈夫？怪我はない？」

問いかけてくるハーマイオニー。余程心配だったのか、その目には涙が浮かんでいた。

「大丈夫。特に怪我はないから……」

そう言っていると映司は立ち上がる。

「アंक、このまま昼食に行こうか？」

映司が提案すると、アंकは頷いた。

「そうだな。ところで……サラって言ったか？大丈夫か？」

「ひゃい……大丈夫でふ」

サラはよろよろと、危ない足取りで立ち上がる。当然、倒れそうになる。アंकは抱き止める形で、サラを支えた。

「おい、大丈夫か？」

サラの顔がゆでダコのように真っ赤に染まり、鼻、耳、頭から蒸気が吹き出した。

「これ…」

「たまにあるのよ。特に魔女は…恥ずかしいから言えないけど」

ハーマイオニーの表情は恥ずかしそうにしていた。

「ふう…サラちゃんを医務室に運んで、昼食に行こうか」

映司の意見に賛成なのか、二人は何も答えず、歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3636w/>

【ハリーポッターと賢者の石 With 仮面ライダーオーズ】

2011年10月7日07時43分発行